
さよなら、独房先生。

日賀 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、独房先生。

【Zコード】

Z7513M

【作者名】

日賀 翼

【あらすじ】

悶々とする思春期反抗期いろいろ真っ盛りな高校生、佐々木比呂
と、奇怪な姉、独房先生こと佐々木かれんの奇妙な日常を描いたコ
メディ（なのか？）ちなみに絶望した某先生とは一切関係ありません
ん。

「んにちは、独房先生

こんなに死にたくなったのは久しぶりだ。そう思いながら、比呂は布団の中で呻いていた。

現在午後四時。部活はサボつた。あいつと顔を合わせたくないからだ。多分向こうも自分がいないと分かってほっとしているだろう。そう想像して、とんだ被害妄想だと思いつながらも胸糞が悪くなつた。

佐々木比呂。高一。弓道部所属。今日、付き合って三ヶ月の彼女にフランされた。なので、彼女いない暦一日目。

畜生思い出して腹が立つ。がりがりと染めたばかりの明るい茶髪をかきまわし、比呂はウォークマンの音量を上げた。流れているロックは、脳のさわくれを洗い流すにはあまりにも軽すぎるやうだった。

『ごめん、別れてくれる？』

土下座の絵文字付きだった。

昼休み、ケー・タイを開いて最初に飛び込んできた文面が、これだ。
差出人は彼女。

意味が、まったく分からなかつた。

昨日帰り道で別れたときは普通だつたはずだ。喧嘩もしていい。機嫌を損ねるようなこともした覚えが無い。

比呂は、半ばパニックに陥りながら、『なんで？』とだけ返した。何かの間違いであつて欲しかつた。友人の悪戯だと送信相手を間違えただとか（それはそれで問題だが）、とにかく、自分が想像する最悪の未来を何とか否定したかった。

五分後、返信が来た。

着メロが鳴つた瞬間にケー・タイを開く。文面を読むうちに、比呂の思考はどんどんと麻痺していった。

そもそも一人が付き合つたきっかけは彼女の告白だったわけだが、彼女が好きだつたのは本当は比呂ではなくて、同じ部活の他の先輩だつたらしい。その先輩には彼女がいた。彼への想いを吹つ切るために、彼女は比呂に告白したのだという。

で、昨日。家に帰つた後、彼女のところにその先輩からメールが来た。えらく落ち込んでいるので、どうしたのかと聞いたら、フランクされた、という。

『それで我慢できなくて告つたらOKもうちゅうちやつた。ごめんね。自分に嘘はつけなかつたの。でも、比呂のことは友達として大好きだから』

「ふざけんなああああああああああああああ

比呂は叫んだ。改めて文を読み返して心底ムカついたので、枕に顔面をうずめて叫んだ。枕つて素晴らしい。防音性抜群だ。密着させると口を動かしにくいのが難点だが。

思考停止状態の昼休みの自分では『分かつた』と返すのが精一杯だつたが今は違う。腹の奥底でつづまく何かが頭をぶち破つて出てきそうだつた。

おいおいなんだよそれ。別れ話をメールでするか。一方的過ぎるだろ常識的に考えて。その上俺は代用品か。これまでのメールやら何やらでの「大好き」「ずっと一緒にいてね」は嘘だつたわけか。まあそれはいいとして彼氏がいる身で告白しに行くのか。なにが『OKもらつちゃつた。』だ。最後の一文で丸く治めたつもりか。火に油を注いでるんだよ気付けよお前この野郎！

などと枕に向かつてしばらく怒りをぶちまけ続けた後、比呂はぐつたりと脱力した。過去の自分にも心底脱力した。

つまり自分は彼女の作った嘘にも気付かずに有頂天になつていたわけだ。その結果が若氣の至りのおそろいのストラップやらハートにまみれたプリクラやらのあれやこれやだつた訳だ。穴を掘りたい。穴を掘つてあの過去の恥ずかしい自分を埋めたい。

鬱から怒り、そこからまた鬱への負のサイクルですっかり心を消

耗した比呂は、じばらぐ呼吸も忘れてだらうと布団の中で溶けていた。

もう駄目だ。

割と本気でそう呟いて目を閉じた、その瞬間。

「お困りかな少年つ」

テンション高くずばあん、と扉を開けて、そいつは姿を現した。

布団から首だけ出してそいつを視界に入れた瞬間、比呂は心の底から、死んでしまえ、と思つた。

殺意の対象は元カノからそいつにシフトチョンジ。彼は枕元にあつた英和辞典（睡眠導入剤兼枕。オプションは乾いた涎だ）を、弓道で培つた腕力で入り口のそいつに投げつけた。一瞬のち、うひやあつという短い悲鳴と辞書が壁に当たつて落ちる音が聞こえる。

ちっ。外したか。

「なつ、何をするのだ少年！」

「あんたも何してんだよ姉貴」

「ノンノンノン。私は君の姉ではない」

立てた人差し指を振る鬱陶しいジェスチャーをつけて比呂の言葉を否定すると、姉 紙袋を被つたスーツ姿の小柄な変質者は奇怪なポーズを決めた。

「独房先生見参。君のストレスを捕縛しに来た」

あなたがそのストレスだよバーロー。

比呂は、無言で布団の中に潜り込んだ。

佐々木かれん。比呂の姉。今年で二十歳になるはずなのだが、こいつを社会人と呼んだら他の成人の皆さんに申し訳が立たないと呂は思つている。

進学もせず定職にも付かず、あっちのコンビニからこっちのコンビニを渡り歩く高等遊民もといフリーター。以前一度お水の仕事に

も手を出したが、気が利かなさ過ぎて二日でクビになつたところ。

「なんだよもう冷たいなあ無視しないでくれよ」

「ふーふーと文句を垂れた後、かれん 独房先生は比呂のベッドにダイブした。かれん自体は小柄なので重くはない。だが偶然肘が鳩尾に入つたらしく、ぐぐもつた「ぐえつ」という比呂の声が布団越しにもれ出た。

「あ、痛かった？」

「急所だよ気をつけや」

「すみません」

素直に謝ると、独房先生は、ちよこん、ヒベッド脇に正座した。そのままごそごそとスーツの内ポケットをあさり、何かを鷲掴みにして枕元にばらまく。

なんとか、ほのかに漂う香ばしい生臭さ。

「……何、これ」

「にほし…」

ストレスにはカルシウムなのだよ、と胸を張つた彼女に向かつて、今度は漢字源で攻撃を仕掛ける。

自分が居た空間を水平に廻いだそれを、ギリギリで避けた独房先生は、きやんきやんと高い声で吼えた。

「さつきから何なのがもう英和とか漢字源とか！ 比呂は勉強しそぎだよ！ 勉強ばっかしてると脳味噌コンクリになつちゃうよがつちがちだよ！」

「あんたみたいに脳味噌といひてん化させたくねーだけだよアホ姉貴」

「ひつどーい、あとノリ悪い。だから我輩は君の姉じやないんだつてば」

「一人称変えても鬱陶しさが増すだけだからな」

「冷たーい比呂くん冷たーい。冷たい男はモテないぞー。多少暑苦しいくらいが丁度いいんだぞー多分。そういうふるはーとふるー」

「ひりんごうるつんとベッド上をローリングする独房先生の言葉で、忘れかけていた事実を思い出す。またも襲い来る鬱の波に呑まれて、比呴は低い声で呟いた。

「つぶーせ俺は冷たいですよー……」

「お、どうしたまさかマジで振られたのか少年」

「ひりんごりりんといつ布団の上の回転運動が停止。どうやら話を聞く体勢に入ったようだ。

布団に潜つている自分がからは見えないが、きっと彼女は目をあらわさせていいに違いない。嘆息すると、半ば捨て鉢になつて比呴は口を開いた。

自分の中だけで悶々とさせてしまふマシな気がしたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7513m/>

さよなら、独房先生。

2010年10月8日12時11分発行